

学位論文要旨

台湾におけるエクストリームスポーツの文化変容
－「極限運動」の創出過程に着目して－

The Study of Acculturation of Extreme Sports in Taiwan

-Focusing on the Emergence of "Jixian Yundong"-

広島大学大学院人間社会科学研究科
教育科学専攻 教師教育デザイン学プログラム
健康スポーツ教育学領域

学生番号 D212456

氏名 豊島誠也

研究目的

本研究の目的は、台湾においてエクストリームスポーツが伝統あるものと結びつけられナショナルなものへと変容する過程をエクストリームスポーツの土着化という文脈から明らかにすることである。

近年の台湾では、若者によって伝統スポーツがエクストリームスポーツと価値づけられたり、国家レベルで進められる文化創意(産業)においては、建築物のリノベーションや宗教的活動とエクストリームスポーツが融合させられるといった現象が見られる。これは様々な伝統の継承において革新的な方法を試みるという点だけでなく、それを通じて新たな文化を創出する契機さえ生み出しているという点で注目に値する。そして、こうした文脈において台湾のエクストリームスポーツは次第に“台湾文化”としてその存在を顕現させつつあるかに見える。

台湾の文化ナショナリズムとスポーツの関係を論じてきたものがある。例えば、清水はスポーツが台湾ナショナリズムと関連させられる事例を検証し、その特徴を①原住民文化の継承、②海洋性の強調、③マイナースポーツの興隆とした上で、台湾は『『台湾的なるもの』の創造』や「新しい誇り」としてこれらのスポーツの振興を国家レベルで発信し、台湾の独自性を強調してきたと説明する¹。台湾ナショナリズムの高揚が中国との差異化を志向し、そうしたなかで、①～③が台湾の独自性<ナショナルなもの>として位置付けられていると清水は考察する。

だが、この清水の論考が主張するように、原住民文化のスポーツや海洋スポーツ、マイナースポーツといった3つの要素だけが「ナショナルなもの(台湾の独自性)」として想像され、実践されていると言えるのか。筆者はそこに疑問を投げかけたい。果たしてそれらの要素をもって「ナショナルなもの(台湾の独自性)」をすべて語りきることができるのか。例えば、清水のいう『『台湾的なるもの』の創造』や「新しい誇り」はグローバルな視点から考察を加えたものであったが、これをローカルな視点で論じることによって見えてくるものはないだろうか。

先述しているように、台湾の若者は、伝統スポーツをエクストリームスポーツとして価値づけたり、文化創意のなかでエクストリームスポーツを活用したりすることで、台湾文化創出へとそれらを接続させているかのように見える。では、なぜ若者はエクストリームスポーツにこうした文化ナショナリズムの契機を見出し、現にそれを実践しようとしているのであろうか。そこには“台湾らしさ”に対する現代台湾の若者のどんなまなざしや思想、価値観が影響しているのだろうか。台湾文化の創出とスポーツの関係を語る際、こういった実践レベルでの微視的観察が必要ではないだろうか。言い換えれば、こうした現象の背後で働いている作用とは、若者が伝統あるものの価値を再評価し、そこにエクストリームスポーツを組み込むことで、台湾人としてのアイデンティティを支える機能を強化することではないか。そうだとすれば、なぜエクストリームスポーツが台湾の若者にとって特別な意味あいを持ったものとして扱われているのかということをお問ねしなければならないだろう。このような問題意識を踏まえ、本研究はエクストリームスポーツが台湾で土着化していく過程を人類学的な視点から再構築し、その特異性を明らかにする。

¹ 清水麗(2013)台湾におけるスポーツとナショナリズム. 清水論編, 現代スポーツ評論 = Contemporary sports critique (27).創文企画,pp.75-84. & 清水麗(2015)台湾-歴史の記憶と新しい誇り (特集 途上国・新興国のスポーツ). アジ研ワールド・トレンド(237), pp.6-7.

研究方法

伝統スポーツのチャングーについては、2019年2月～2020年8月、2023年6月14日～9月16日にかけて参与観察を行った。また2023年の調査では、実際に調査者が大会に出場したことで、その内部の様子を当事者目線から考察している。文化創意の2例については、十鼓文創園區は参与観察、九天盃太子極限環台賽は大会期間中に大会実行委員へのインタビュー調査を含めた参与観察を実施した。

それ以外の事例は基本的に文献調査を行ったが、第4章で取り上げる鹽水蜂炮については現地にて参与観察を実施している。

はじめに

ここではまず、本研究の調査地である台湾を「地理」、「歴史」、「民族・宗教」、「政治」の側面から概観した。その後、先行研究の検討では、「エクストリームスポーツ研究の現状」、「台湾文化創出の背景」の2節、さらにもう1節、「台湾におけるスポーツとナショナリズム」では、「近代スポーツの導入」、「オリンピックとチャイニーズ・タイペイ」、「台湾独自性の強調」と3つに区分し、先行研究の提示、および問題の所在を明示している。

第1章 エクストリームスポーツの文化的位相

第1章では、エクストリームスポーツの文化的位相として、エクストリームスポーツの定義を類義語と併せながら検討した。その際、エクストリームスポーツと同義語である、「オルタナティブスポーツ」、「ライフスタイルスポーツ」、「アクションスポーツ」の3つについても名称の使用背景を整理している。

エクストリームスポーツの定義としては「危険や極限状態を含み、若者を中心として魅了していくスポーツ」とした。この定義は台湾においてもほとんど同一であるが、台湾における「極限運動(エクストリームスポーツ)」の「極限」には、ストリートアートや音楽など、サブカルチャー的要素や抵抗概念が含まれることを指摘している。

第2章 伝統スポーツとエクストリームスポーツの交わり

：「Red Bull TV : Archaic Festivals」の事例から

第2章では、本研究で主題の一つになっている、伝統スポーツとエクストリームスポーツの交わりを分析した。まず、Red Bullを概観し、歴史的にエクストリームスポーツと共に発展してきた経緯を示した。その後、Red Bull TVがオンラインで運営する Archaic Festivals の映像(1.ロイヤルシュローヴタイトフットボール、2.カスカモラス、3.御柱、4. Gaucho Games 5. Gotad Ad Kiangnan 6. Tapati Rapa Nui)を対象として、伝統スポーツとエクストリームスポーツの関連性を検討した。結果として、「超越体験と信仰」、「危険への意識」、「勇敢さへの評価」という3つの共通要素が見られると結論づけた。

第3章 文化創意とエクストリームスポーツ

第3章では、台湾が国家レベルで取り組む「文化創意(産業)」でエクストリームスポーツが活用されている背景を、「十鼓文創園區」と「九天盃太子極限環台賽」を事例として分析を行なった。文化創意とは「文化創意産業(Cultural and Creative Industry)」、「文創」とも称され、歴史的建築物や文芸品などに若者がクリエイティブな発想で新規性を

付加していくことで、台湾の文化創出と発展、そして継承を促すものとして、2000年代から国家政策レベルで推し進められてきた取り組みである。言うなれば、「伝統のリノベーション」とも表現できる。

本章では、文化創意のなかでエクストリームスポーツが活用される理由を、①本土化に伴った影響、②新自由主義的イデオロギーが強い影響を与えていたという文脈から検討している。

第4章 エクストリームスポーツと見られる伝統スポーツ「チャングー」

第4章では、台湾の伝統スポーツである頭城チャングーを研究対象として、スポーツ化とエクストリームスポーツへの接近を捉えた。特にチャングーの選手が「チャングーはエクストリームスポーツのようなもの」と語る様子は、まさにチャングーをエクストリームスポーツと価値づける実情を捉えるものであった。さらに台湾文化部(日本でいう文化庁)のSNSでは、「台湾最古のエクストリームスポーツ?(臺灣歴史最悠久的極限運動?)」というタイトルでチャングーが紹介されているように、台湾社会でもチャングーがエクストリームスポーツと捉えられる実情が垣間見える。本章では、2019年頭城チャングーで参与観察を行い、その観察結果から、チャングーがエクストリームスポーツとして理解される背景を「極限集中状態」、「規定路線からの“ハミ出し”」、「アクシデントを楽しむ演出」、「宗教とスピリチュアル」としてまとめた。

また2023年には、筆者が実際にチャングーの大会に出場し、追加調査を行った。2019年の調査に加え、チャングーがエクストリームスポーツと捉えられる背景の考察を補完している。さらに、台湾伝統スポーツである鹽水蜂炮にも参加し、その調査結果についてもチャングーと同様にエクストリームスポーツとの交わりを考察している。

終章 台湾における「極限運動」とエクストリームスポーツの土着化

終章では、台湾の人々によって、果たしてなぜ伝統あるものとエクストリームスポーツが組み合わせられているのか、その背景を総合的に考察した。若者が台湾に元々あった様々な文化の極限的要素をエクストリームスポーツと関連させて再評価し、新たに価値づけることによって、伝統あるものとエクストリームスポーツの組み合わせが発生していた。そしてそれは、台湾の文化生成過程のなかで見られる「伝統あるものの見直し」が台湾文化の基層に根づいているからだと考えた。さらにそういった動きが契機となり、台湾ではエクストリームスポーツが多分化を果たし、「極限運動」として土着化しているとした。その結果、極限運動は台湾ナショナリズム高揚において極めて重要な「台湾らしさ」を支える機能を果たしているという結論に至った。そうすると、この「台湾らしさ」と語られるものこそ清水が指摘した「ナショナルなもの」なのではないかという可能性が見えてきた。台湾の人々によって、台湾の人々のために創造される極限運動こそが、「ナショナルなもの」であり、真の“台湾スポーツ”ではないか。台湾では、極限運動の存在自体が台湾ナショナリズムと絡む複雑かつラディカルな志向を呈しているのである。

表1 エクストリームスポーツと**極限運動**の特徴

<p>エクストリームスポーツ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 危険や極限状態を含み、若者を中心として魅了していくスポーツ
<p>極限運動</p>	<ul style="list-style-type: none"> 危険や極限状態を含み、若者を中心として魅了していくスポーツ <p style="text-align: center;">+</p> <ul style="list-style-type: none"> 台湾自体が持ち合わせてきた様々な文化の極限的要素を、エクストリームスポーツとして価値づける 台湾人アイデンティティを支え、刺激する「苦難への挑戦」、「抵抗」概念を内包する